



▲こつこつ積み重ねた活動の成果を堂々と発表。



小さな蛍から、大きな夢が生まれた。

大門町立 浅井小学校

学校長：開発 勇吉先生

指導教諭：高木 司先生

発表児童：6年 7名

浅井小学校の校区は、西に庄川が流れ、広々とした田園が広がる自然豊かな湧水地帯として知られている。全校児童数は144名。豊富な地下水を生かした様々な活動が子供たちの手によって行われている。全校児童が学年ごとに分担して、サケの卵の孵化・飼育・放流、トミヨの飼育・生態観察、庄川水系の淡水魚を集めたミニ水族館の運営、蛍の飼育、藻刈り活動など、恵まれた水環境を生かし、守る活動を積極的に進めている。また今年度は、子供たちの活動が契機となり地域の人たちによる、地域の水環境を守る「水・人・生き物いきいきトライアングル条例」が制定され、「浅井水ネット」(浅井地区水環境保全協議会)が設立された。



「よみがえれ、浅井の蛍プロジェクト」 ～命を育む水、井戸水の有効活用～

私たちは、「浅井を蛍の光でいっぱい」を合い言葉に「よみがえれ浅井の蛍プロジェクト」に取り組んでいます。6年生21人が、蛍川・人工池・水槽グループの3つのグループに分かれて、蛍に適した環境を工夫して実行しています。私たちは、このプロジェクトを通して、人間と蛍の共存・共生について、人と水、生き物の共生について、考えを深めることができました。



▲活動への熱い意気込みが注目されました。

高木 司 先生より

「人と水、生き物の共生」を願う子供たち

卒業した先輩たちの取組みを受け継ぎ、「浅井を蛍でいっぱいになりたい。」と取組み始めた蛍の飼育活動。3つのグループに分かれての活動から、次第に、蛍の命は、人、水、植物といったまわりの環境とのかかわりが大きな問題になるということに子供達は気付いてきました。けれども、便利な生活を望み、環境を破壊しているのは、自分たち人間です。人間と蛍が、共生するにはどうすればいいのかを考え、子供達は自分たちの手で、蛍が住みやすい環境を整えたエリアとしてのビオトープ作りを進めています。卒業する時には、蛍小屋で飼育中の幼虫をビオトープに放し、初めの願いを叶えようと現在も活動は進行中です。



▲あくまで「浅井の蛭」にこだわって捕獲しました。



◀3つのグループに分かれて飼育に挑戦。蛭川グループは、幼虫のエサになるカワナシの飼育や産卵場所となるミスゴケも栽培しました。



▲人口池グループは、蛭が住みやすい自然環境を工夫して整えました。



◀水そうグループは、井戸水をじょうずに利用しました。

考えたこと・感じたこと

浅井の「水」から学んだこと

稲垣友哉（6年）

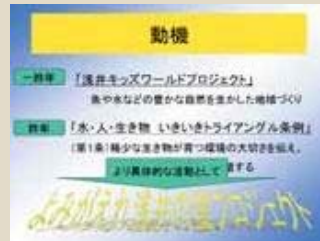
浅井の水を生きし、蛭の飼育をしました。蛭の飼育をとおして、蛭の数が減少していることが分かりました。蛭が自分たちで生きていくには、僕たち人間が壊してしまった今の環境では、とても難しいのが現実です。

人間、水、生き物、植物の共存・共生について考えるとき、僕たち子どもだけでは、とても実現できません。大人や地域への呼びかけをもっともっていきたいと思います。浅井小学校が統合されても、このプロジェクトが是非、受け継がれていってほしいと思います。そして、「浅井自然パーク」が実現することを願っています。

学習テーマの設定

“浅井の蛭”を育てたい

浅井小では豊富な水環境を学びの場として活用してきました。学校に井戸水がわいたことをきっかけに、6年生が蛭の飼育に取り組みました。

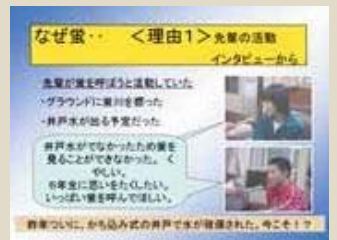


先輩たちから引き継いだ「浅井キッズワールドプロジェクト」を、より具体的な行動へ移そうと、「よみがえれ浅井の蛭プロジェクト」をスタートしました。

学習の展開

井戸水を生かそう

先輩たちがグラウンドに蛭川を作りましたが、井戸水が出ず蛭は呼べないまま卒業。たくされた思いに応えるように、ついに昨年、井戸水がわいた！



感動で輝く町にしたい
蛭は卵で1か月、幼虫で9か月、成虫になって輝くのは、たった2週間です。その感動のないのちの輝きで、大門町をいっぱいになりたいと思いました。

成虫の捕獲から始める

いざ飼育しようとする、なかなか幼虫が見つかりません。そこで成虫をつかまえ、生んだ卵をふ化しようと考え、鴨川などで成虫を捕獲しました。



産卵してふ化へ
捕獲したメスの成虫が産卵。ふ化して幼虫となりました。ケースからは出して死んでしまう幼虫もいて、注意深く協力して飼育しました。

蛭との共生へ広がる夢

蛭が生きるには周囲の環境とのかかわりが大切と気づきました。人間の手で、蛭が住みやすい環境を整えた「あさい自然パーク」の提案へと夢が広がりました。

